

狂言における因幡堂の位相

林 和利

一、はじめに

因幡堂とは、京都市下京区因幡堂町（松原通烏丸東入）にある平等寺のことである（図1参照）。本尊は重要文化財の薬師如来で、信濃善光寺の阿弥陀如来、嵯峨清涼寺の釈迦如来とともに日本三如来に数えられている。この薬師如来は、因幡の国司であった橘行平が同国の海中から引き上げて祀ったものであることから、俗に因幡堂または因幡薬師と称されてきた。

その因幡堂が狂言にしばしば登場する。曲名そのものが「因幡堂」と名付けられた狂言をはじめとして、「鬼瓦」「仏師」「六地藏」「金津（金津地藏）」などの諸曲がこの寺を舞台に用いている。実在する固有の寺院がこれほど狂言に用いられている例はほかにない。その理由は何なのか。狂言との関係はどうなのか。そのような疑問を明らかにすべく、因幡堂の位相を多角的に探ってみたい。

二、因幡堂を舞台にした狂言

まず、因幡堂を舞台にして作られている狂言の内容・作柄等を確認しておきたい。

何と言っても、この寺院の名称をそのまま曲名に用いた「因幡堂」なる狂言が存在するということは、本稿のテーマにとって重要な意味を持つ。現行の本狂言において、実在する固有の寺院名を単独で曲名に用いた例は他にないからである。あえて言えば、「八尾」という狂言名が八尾地藏の省略形と考えられるので、それを安置する大阪府八尾市の常光寺のことをさしているということになるのか。しかし、通常の認識としては、この曲名から固有の寺院が連想されることは少ないであろう。そのうえ「八尾」は、「因幡堂」のようにその境内を舞台としたものではなく、また八尾地藏そのものが登場するわけでもなく、手紙の差出人としてせりふに出てくるだけなので、扱いの比重がまるでちがうと言わねばならない。

このほか番外曲や廃曲を入れても、寺院名を単独で用いた例は見当たらず、清水座頭（清水寺）、鞍馬参り（鞍馬寺）、竹生鳥参り（竹生鳥参財天）など、他の言葉と合成して名付けられた曲名がいくつある程度である。また、寺院に限定せず神社にまで枠を広げても、「西宮参り」（西宮神社）、「湊川参り」（湊川神社）などがあるだけで、単独で用いた例は見いだしがたい。しかも、これらはさほどポピュラーな曲でもない。因幡堂だけが特別な存在なのである。狂言と因幡堂との間に何か強いつながりがあるのではないかという予測

が、まずは成り立つであろう。

さて、「狂言「因幡堂」」は、大蔵流・和泉流・鷺流の各流にあり、大酒飲みの妻と離婚して、新しい妻を娶ろうとする男の話である。実家に帰った妻に離縁状を出し、自分は因幡堂の薬師如来に妻乞いをする。これを知った妻は腹を立てて因幡堂へ行き、通夜をしている夫に、あたかも仏による夢のお告げのごとく「西門に立った女を妻にせよ」と言い置いて、被衣姿で立つ。男は仏のお告げと信じて連れ帰り、祝言の盃事ののち被きを取って仰天するという内容で、各流大同小異である。

この曲は、大蔵流最古の『虎明本』、和泉流最古の『天理本』をはじめとして、両流各種台本に収録されており、近世初期以前に成立して廃絶されることなく現在まで上演されて来たことがわかる。ただし、鷺流の場合は最古の『保教本』に収録されていず、幕末の『賢通本』まで待たねばならない。その他、『狂言記(外五十番)』にも収録されている。

一方、天正年間の奥書を有する『天正狂言本』には入っていない、それ以前の上演記録も見いだせない、室町時代の成立かどうかの確認はできない。しかし、狂言の場合、上演はされているのに曲名の記録のないことが中世においてはむしろ普通であるし、そもそも狂言の上演そのものが記録上無視されることも多かった、記録がないからと言って、室町時代から存在した可能性がまったくないとは言えない。むしろ複数の流儀において近世初期の台本に収録されているのだから、室町時代成立の可能性を含んで考えておくべきであろう。

また、「鬼瓦」も各流にある狂言で、『虎明本』『天理本』『保教本』すべてに収録されており、『狂言記(外五十番)』にも入っている。

(三四)

長期在京して訴訟がなくなった遠国の者が帰郷するにあたり、因幡堂へお礼参りに行くと、御堂の鬼瓦が国元の妻によく似ているので、なつかしがって泣き出すという内容。ただし、鷺流だけは因幡堂ではなくて、六角堂へ参詣する。

それ以外の「仏師」「六地藏」「金津」は類型的な作品群で、都へ仏像を買い求めに来た田舎者に、人間が扮した偽仏を売り付けるといふ共通のパターンで、できあがった仏を渡す場所が因幡堂の境内という設定になっている。これらの曲もそれぞれ各流最古の前掲台本に収録されている。ただし、やはり鷺流では場所が異なり、「仏師」は誓願寺で、「六地藏」は六角堂である。また、「金津」にいたっては田舎者を待たせておくだけで、とくに寺院の境内ではない。これは和泉流も同様なので、「金津」において因幡堂を用いるのは大蔵流のみなのである。したがって、因幡堂と最も深い関係にあるのは、作品の上で見ると、大蔵流であるということになる。

また、鷺流の狂言で因幡堂を舞台としているのは、その名を曲名に用いた「因幡堂」のみであるという点も見逃すわけに行かない。それもこの曲はかなりおくれ同流のレパートリーに入ったと判断できるわけだから、鷺流と因幡堂の結び付きは薄いと見なければならぬ。元来はほとんど関係がなかったと言ってもよさそうである。さらには、四種ある狂言記類(正・続・拾遺・外)では、因幡堂を素材にした狂言のすべてが『外五十番』に収録されているというのにも気になる。池田広司『古狂言台本の発達に関する書誌的研究』(風間書房・昭42)によれば、諸本比較検討の結果、『外五十番』は「筋立てやせりふもかなり自由であった固定前の大蔵流や大蔵の弟子であった三宅家の町風の台本に拠ったものではないか」という。やはり、ここでも大蔵流とのつながりが浮上してくるのである。

どうやら、因幡堂を舞台にした狂言は、大蔵流系ではなかったかという仮定が成立しそうである。おそらく、大蔵流は他流よりも多く因幡堂の境内を使用したのであって、その狂言師たちによって作られた作品群ではないかと推測される。

ちなみに、大蔵八右衛門虎光の記した『狂言不審紙』は、「因幡堂」と「鬼瓦」の作者を「二代之内」としている。二代之内とは、大蔵流八世金春四郎次郎と九世宇治弥太郎政信のことを指すらしい。もちろん、付会されがちなのが作者付の常であり、この説をそのまま鵜呑みにするわけにはいかないものの、大蔵流内での成立を示唆する消極的な材料にはなりえようか。

三、因幡堂の縁起

現在の因幡堂すなわち平等寺は、境内の広さや伽藍の規模、あるいは知名度から言っても、さほど目立った存在ではない。なぜこの寺だけが狂言に頻出するのか、不思議なほどである。中世には有名であったというが、いったいどの程度であったのだろうか。まず、その縁起と歴史のあらましを確認しておく必要がある。しかし、平等寺は過去幾度も火災にあっており、寺院所蔵の古文書の類はほとんど失われている。また、由緒・歴史等を記したパンフレットの類も現時点では作成されていないという。

さしあたり縁起については、絵巻の『因幡堂縁起』（重要文化財、東京国立博物館蔵、図2参照）をはじめとして『一遍聖絵』『碧山日録』『擁州府志』などの諸書に記述があるが、『山州名蹟志』（正徳元年刊）の記事が比較的詳細でよくまとまっているようなので、これを引用しておく。

因幡堂本尊伝。往昔、天竺祇園精舎の一院、所安療病院、釈尊の造立なり。後世彼院荒んとするに及んで、東方に飛去り竜宮。彼土の有情を度す。然して至在数百歳の後、吾朝村上天皇の御宇、天徳三年春三月、大納言橘好古孫、少将行平依勅、因幡国一宮に参詣し、疾を感ず。或夜夢に、老僧来て告て云く、治病には当州賀留浦に、一浮木の波に漂泊あり。是を可採。是則有情を為利、仏国より来れりと、云畢て覺たり。翌日家臣を遣して、網を下すことを議す。老翁来り告云、海底より放光、已に四十年来なり。故に諸魚恐れて不住。仍て以て漁人業を失ひ、居宅を去て荒村となる。海光此比又盛なりと。遂に網を下すに、光明赫奕として、薬師仏現じたまへり。行平卿是を拝して、病苦癒たり。頓て就其地、堂を造つて安靈像。其他殊に豆葉の以繁、号豆葉寺。後座光寺と改む。行平感信の余、末子を為僧令守。其後又本尊、飛で洛陽行平の宅に入来す。時は一条院の長保五年四月七日なり。卿即其座無を以て、安碁盤。然ふして後、好古の移持仏堂。其夜又飛で帰行平、告て曰く、此地は、是東方淨瑠璃世界の西門に中れり。在此所苦の衆生を度すべしと。是故に、点宅地為寺。今の地境是なり。初長保五年、本尊来現するに、其夜異人出て洛中を巡つて、五条行平卿の家に、西天竺より来る薬師仏あり。往て可結縁と触たり。又因州より飛去るに、後光台座は彼寺に存す。仍て号座光院。今尚あり。

夢のお告げによって橘行平が因幡国賀留浦の海中から引き上げた薬師仏が、洛中の行平邸に飛来し、これを祀ったものであるという。時に長保五年（一〇〇三）のことである。そして、台座を残して飛んで来たから、碁盤を代用にしてその上に安置したと説いている。

この縁起伝説を絵にしたものへの言及が、室町時代の日記類『満濟准后日記』『実隆公記』『御湯殿上日記』などに見られるので、この伝説が当時いかに一般に流布していたかが知られる。

さらには、江戸時代にも同縁起譚が広く流布していたらしいことを、『軽口露がはなし』に収められた笑話「新仏一体の望」が示している。

にはか道心起し、新仏一体のぞみて、仏師所へ行、大座後光のせんさく申折ふし、「それに付、京の因幡堂の本尊薬師如来は碁盤に乗らせ給ふが、あれはめづらしき大座にて侍る。何と謂れの有事か」といへば、「成程いはれもあり、尤成事なり」といふ。「其子細は」「あのいなば堂は四町にか、つた」といふ。

当時、因幡堂は広大な境内を有し、周囲四つの町にまたがっていたという。一方、囲碁用語に「シチョウウ(征)」という言葉があり、^(注6)「四町」と「征」をかけて、だから因幡堂の薬師如来は碁盤に乗っているのだとシャレで説明した笑い話である。

この笑い話は薬師如来が飛来したことには直接触れていないけれど、それを前提にした笑いであるはず。聴衆がその縁起譚を常識として知っていたからこそ、この笑いのネタが受けたのであろう。少なくとも、因幡薬師に台座がなく、碁盤に乗った姿であることはよく知られていたことがわかる。すなわちこれは、因幡堂の大衆的認知を示すものと言えようか。

また、因幡堂がいかに広大な敷地を持っていたかということも、この話は明示している。しかも京都の中心地とも言えるような立地条件である。当時の京都町衆にとっていかに馴染み深い寺院であったかが推察できよう。

このように因幡堂は、その大衆性と庶民性ゆえに狂言に取り上げ

られたと考えることはできよう。しかし、それなら同様に町堂として京都町衆に親しまれていたはずの六角堂(頂法寺)や革堂(行願寺)が、鷲流の一部例外を除けば、ほとんど出て来ないのはなぜなのか。やはり、因幡堂には直接狂言に係わる何らかの要因があると見なければなるまい。ことに、大蔵流の狂言師たちと同寺との関係は、上演場所の提供など、なにがしかの深い関係があったのではあるまいか。

四、因幡堂の歴史

建立後中世以前の因幡堂の変遷をあらまし眺めておく。

のちに広大な敷地に発展した因幡堂も、平安時代は小規模の寺院であったことが、『中右記』永長二年(承応元年、一〇九七)一月二十一日の記事^(注7)によってわかる。

戊時許蓬屋之北隣一許町小屋等焼亡、(中略)烏丸東有小靈験所、世云因幡堂、已烧了、仏像雖奉取出、堂令已煨燼、哀哉、

類焼によって焼失した因幡堂のことを「小靈験所」と表現しているのである。先に見たように、当初は橘行平の私邸に堂を設けて祀ったものであるから、もともとさほどの規模ではなかったであろうが、それから約九十年ほど経ち、邸の主人も亡くなって、さらに縮小していたのであろう。

なお、これ以後も因幡堂はたびたび火災に遭っており、そのために所蔵文献のほとんどが失われ、過去の記録に不明の部分が多いのであるが、中世以前において確認できる火災の記録は次のとおりである。

康和五年(一一〇三)十一月十六日……『本朝世紀』

嘉承三年（一一〇八）二月八日……『中右記』
 康治二年（一一四三）十月十三日……『百鍊抄』
 仁平三年（一一五三）四月十五日……同右
 平治元年（一一五九）十一月二十六日……同右
 安元三年（一一七七）四月二十八日……『山槐記』（治承三年二月二十八日条）

寛元四年（一二四六）六月六日……『百鍊抄』

建長元年（一二四九）三月二十三日……同右

元中八年（一三九一）十一月十日……『南方記伝』

永享六年（一四三四）二月十一日……『看聞御記』

さらにこののち、近世にも火災があったらしく、現在の建物は明治十九年（一八八六）の再建であるという、このような数々の火災のゆえに、中世における因幡堂の実態が不詳なのであるが、狂言と深い関係があったと思われるだけに、遺憾というほかない。

さて、一旦衰微した因幡堂が、そののちのような経緯で発展を遂げたのか不明であるが、『都名所図会』（安永九年刊）等の記述によれば、承安元年（一一七一）に高倉院から平等寺の勅額を賜ったというのだから、その当時すでに、それが可能な程度の存在であったはずだし、そのことがさらなる規模拡大の契機になったのである。

また、鎌倉時代の弘安七年（一二八四）頃、時宗の開祖である一遍がこの寺に住んでいたことが、『一遍上人語録』の次の表現によって伺われる。

（一遍が）因幡堂にうつらせたまふころ、土御門の入道前内大臣、念仏結縁の為におはしませし後に……

浄土宗に学んで時宗を開いた一遍が居住するくらいだから、この

当時の因幡堂の宗旨が、少なくとも真言宗に限定したものでなかったことは明らかだろう。また次に見るように、応永年間（一三九四～一四二八）には天台宗に属しており、宗旨が一定でなかったことを推測せしめる。さらには、同じ天台宗でも寺門派総本山園城寺（三井寺）の末寺から、同派大本山聖護院の末寺に鞍替えしていることも、『康富記』応永二十五年（一四一八）七月二十六日の記事¹⁰によって判明する。

五条東洞院因幡堂者、園城寺末寺也、而因幡堂者為聖護院之末寺之由申之、叛三井寺云々、仍自園城寺押寄于因幡堂、可打毀僧坊等之由風聞之間、此間侍所「二色兵部并小舎人雑色等」、勢并近辺之町人等大勢、昼夜警固因幡堂云々、

（一）内は原文割り書き

鞍替えを知った園城寺の大衆が因幡堂を襲撃するといううわさが聞こえたので、近辺の町衆がこの寺を昼夜警護したという。すでに京都町衆の心の拠り所として重要な存在であったことを伺わせるエピソードである。庶民の強い支持を得た寺院であったらしい。

また、その一方で将軍家とも深い関係のあったことが、『満濟准后日記』応永三十一年（一四二四）十月九日の記事¹¹によって判明する。すなわち次のとおりである。

自今日御所様因幡堂御参籠。自今夕御方様御祈不動護摩始行。道場東向六間。如御修法時。壇所笠懸馬場黒木御座所也。其処ヲ少々室礼令参住了。護摩開白如常。念誦伴僧等今度略之。承仕一人常善。但明練相共道場等料理。開白仏供一隅分也。仍左右各二坏。大幔後方一方許引之。阿伽棚立之。毎夜仏供退紅二人長櫃ニテ昇之。駈仕一人相副。大略如修法時也。開白重衣。宥濟律師。親秀上座等供奉。各单衣体。御加持料二礼盤ノ前ニ

畳一枚敷之。神供淳基僧都。壇行事同勤仕。壇所奉行快円法橋。胤盛上座。室礼用脚千余疋自納所下行。道場方同前。承仕方百五十五疋。駈仕方七十余疋云々。

相当の規模で祈祷が行われたことが判るが、いずれにせよ將軍家がたびたび参籠しているということは、その他の貴族の尊宗も集めていたことが想像される。後述のように、天皇家による参詣の記録もあるほどである。したがって、貴賤を問わず、幅広く親しまれた寺院であったわけであり、このような中世の状況を考えれば、なるほどこの寺院が狂言の舞台として繰り返り取り上げられても不思議ではないと言えそうである。

それにしても、現在は真言宗の因幡堂が、室町中期に天台宗の寺院であったというのは驚きである。同じ密教とは言え、むしろ近親的存在であるがゆえに両者相入れぬところがあってもおかしくない。いついかなる事情で転宗したのか興味深いところであるが、現住職の大釜諦順氏によれば、「資料が焼失してしまっているので詳細は不明であるものの、近世初期には真言宗の住職になっていた」という。安永九年(一七八〇)刊の『都名所図会』には、「寺務は天台聖護院御門主、寺僧は真言宗なり」とある。江戸中期に至っても、なお、両宗相乗りの形で天台宗とのつながりがあったことがわかる。ともあれ、狂言の生成とおぼしき時期に天台宗であったという事実は見逃すわけにいかない。なぜなら、大蔵流の伝承で多くの狂言の作者として伝えられているのは玄恵上人であるが、彼はほかならぬ天台宗の僧侶だからである。もちろん玄恵作者説をそのまま鵜呑みにできないことは言をまたず、ほとんど信用できない仮託と言つてよいかもしれない。しかし、火の無いところに煙は立たずである。仮託なら仮託でそれが生ずる背景があったはずであり、少なくとも

玄恵を作者とするにおいて、彼を狂言と結び付け得る何らかの要素があったものと考えられる。その一つが天台宗という宗旨であった可能性はあるまいか。

たとえば、因幡堂の境内において狂言の演じられることが多く、ここにおいて新しい狂言の生まれるような環境があったとする。場合によっては、因幡堂の僧侶たちが狂言のストーリーを考案するということだってあり得たかもしれない。とすれば、天台宗の寺院もしくは僧侶と狂言の生成とを結ぶ関連図式が成立するわけで、それが常識のごとく定着していたなら、玄恵を狂言の作者に仮託するにおいてあまり違和感はないという道理になろう。しかし、これを裏付ける具体的な資料は見当たらず、あくまで仮説の域を出るものではない。因幡堂の古文書類が焼失していなかったならばあるいは、と惜しまれる。

五、因幡堂における芸能上演の記録

因幡堂における芸能上演ほどの程度であったのだろうか。それに関する記録を中世に限って抽出してみよう。^(注12)まず、『実隆公記』延徳元年(一四八九)十月六日の条に、勸進猿楽の記事が見える。

今日猿楽「於因幡堂下辺自去三日勸進至今日云々、大夫六郎男也」可構棧敷可来之由連輝軒雖報給、故障之由申了、

(「」内は原文割り書き)

また、『親長卿記』も同日、この催しを次のように記している。

見物勸進猿楽、六郎大夫手猿楽也、

さらに、『山科家礼記』もこれを記録している。

勸進猿楽今日はて候也、

要するに、延徳元年の十月三日から同六日までの四日間、因幡堂の境内において勸進猿楽が催され、そのときの大夫が手猿楽の六郎（またはその息子）であったというのである。六郎とは当時、この前後の文献に頻出する手猿楽者中西六郎のことに相違ない。彼は幼名を千世寿といい、少年のころから宮中に入りして女房たちにかわいがられ評判のよい手猿楽者であったことが、『実隆公記』や『お湯殿の上の日記』『後法興院記』などの記述によってわかる。

いずれにせよ、この勸進猿楽が、複数の文献に記録されているということは、よほど世間で注目された大きな催しだったにちがいない。手猿楽者とは言え、宮中ご用達として演技に定評のある中西六郎一座の数日に及ぶ演能ということで、評判を呼んだのであろう。その興行地が因幡堂だったのである。何のための勸進かは不明だが、時期的に考えて、応仁の乱（一四六七）後の荒廃した因幡堂の修築・再建を目的としたものではなかったかと察せられる。

狂言については何も記述がないが、能とともに当然併演されたはずである。このときのみならず、当時の手猿楽狂言の上演場所として、京都町衆がこぞって集まるこの寺が選ばれたであろうことは、想像に難くない。

因幡堂における芸能の記録としてもう一つ、やはり『実隆公記』の永正二年（一五〇五）正月二十一日の条に、次のような記事が見られる。

今日可詣平等寺当年御重厄之間、毎月七人可参詣也、（中略）
今日各参詣神妙、可勸一盞之由勅定、御樽、御土器物等被下之、
仍各賞翫、及小音曲、有興、

天皇の厄年には勅使が平等寺すなわち因幡堂に代参したのであるが、この年はまさにそれに当たり、それも重厄だったので、毎月七

人が参詣することになったという。この日は正月なのでその最初の参詣が行われたわけだが、酒や食物などの供え物とともに、小音曲すなわち軽い芸能が奉納されている。能・狂言ではなく延年の類いだったのだろうか。いずれにせよ、天皇の厄年のたびごとに、この寺において何らかの芸能が演じられたものと見られる。

かくして、記録の数こそ少ないが、因幡堂が芸能上演の場であったことが実証できる。町堂として京都町衆に親しまれた因幡堂は、まさに貴賤群集の場所として栄えたわけだが、そのような寺で、何も見世物が行われなかったと考える方が無理である。むしろ、種々雑多な大衆芸能が繰り広げられたと見るべきであり、その中に猿楽、ことに狂言が含まれていたと判断するのは、さほど不自然なことではあるまい。このような環境のゆえに、大蔵流系統の狂言の上演場所としても、因幡堂が大きくクローズアップされた時期があるにちがいない。そのころに成立したのが、「因幡堂」はじめ、この寺を素材とした一連の狂言だったのであろう。

なお、芸能記録ではないが、前掲『軽口露がはなし』のほか、『浮世物語』（寛文初年刊）や『松の葉』（三味線歌謡集、元禄十六年刊）など文学作品のジャンルにおいても因幡堂への言及があり、当時の一般庶民への知名度のほどが推し量れる。芸能上演の場であることが、庶民レベルの知名度をアップさせる結果にもなったのであろう。

六、むすび

以上、狂言における因幡堂の位相を種々の角度から考えてみたわけだが、この寺院を舞台にした狂言が生まれた環境は、ある程度明

らかになったかと思う。

要するに、因幡堂が、その縁起譚や薬師信仰とともに京都町衆に最も親しまれた町中の寺院であり、まさに門前市をなすがごときにぎわいの中で、おそらくは狂言の上演も頻繁に行われたであろう。それが因幡堂素材の狂言を生み出す最大の要因だったのである。場合によっては、寺僧が狂言の制作に携わった可能性さえ考えられる。また、寺院側が意図するしないにかかわらず、結果としてこの寺の知名度を上げる宣伝の効果ももたらしたのであろう。

ただし、因幡堂に深く係わった形跡のある大蔵流と、ほとんど係わりを持たなかったかに見える鷺流と、流儀による事情の差異のあることも判明した。どうやら因幡堂素材の狂言は大蔵流の中で形成されたと見てよさそうである。

注1 『狂言記拾遺』には「八尾地蔵」の曲名で収録されている。
注2 曲目の確認は、池田広司著『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（風間書房・昭32）所収の「狂言曲目所在一覧」による。

注3 小林責著『狂言史研究』（わんや書店・昭49）の記述による。

注4 引用は、日本古典文学大系『江戸笑話集』（岩波書店・昭41）巻末補注に翻刻されたものによる。

注5 引用は、前掲『江戸笑話集』による。

注6 『大辞林』（三省堂・昭63）によれば、囲碁の「征（シチヨウ）」は、「当たりの連続で斜めに追いかけると、行く手に味方の石がない限り、盤端で取られる石の形」であるという。

注7 引用は、『増補史料大成 中右記二』（臨川書店・昭40）に

よる。

注8 日本歴史地名大系『京都市の地名』（平凡社・昭54）の「因幡薬師」の項による。

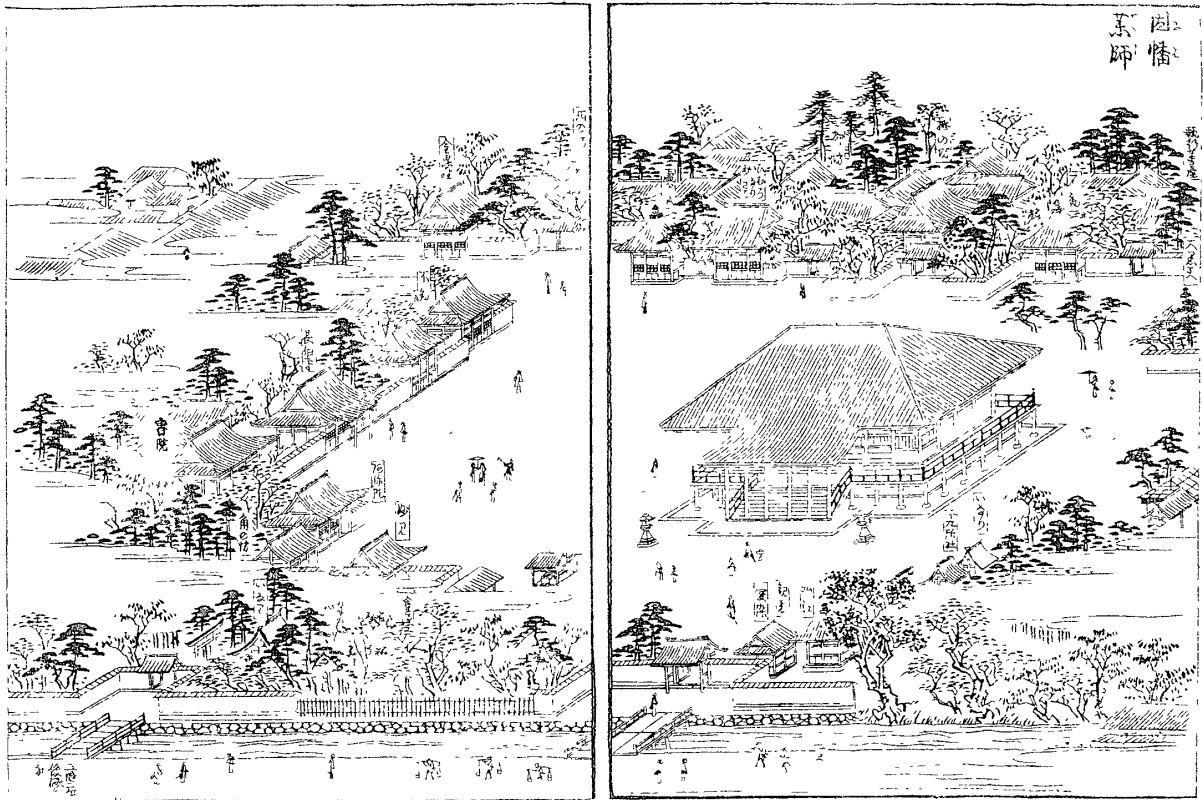
注9 引用は、日本古典文学大系『仮名法語集』（岩波書店・昭39）による。

注10 引用は、『増補史料大成 康富記一』（臨川書店・昭40）による。

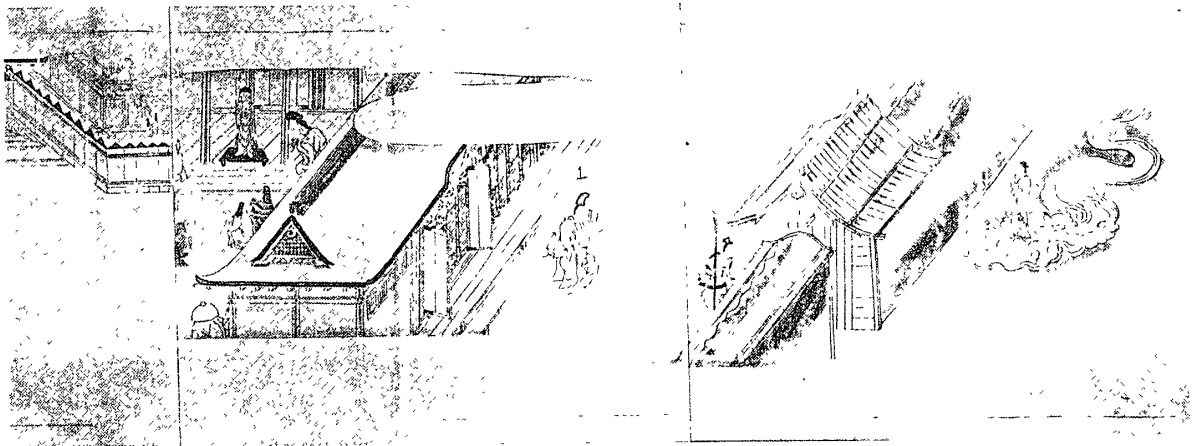
注11 引用は、『続群書類従 補遺一』（続群書類従完成会・昭9）による。

注12 記録の抽出にあたっては、小高恭『中世芸能史年表』（名著出版・昭62）を参照した。引用も同書による。

なお、本稿の資料調査にあたり、名古屋女子大学図書館・愛知県立芸術大学附属図書館・愛知県図書館・名古屋市鶴舞中央図書館の諸機関の蔵書を利用させていただいた。記して感謝申し上げます。



【図1】江戸中期の因幡堂境内
 (安永9年刊『都名所図会』、名古屋女子大学図書館蔵)



【図2】『因幡堂縁起』(重要文化財、東京国立博物館蔵)より、
 行平邸に葉師像飛来の図
 (『新修日本絵巻物全集』第30巻、角川書店・昭56)

(四)